

(国語)

自ら学び、自ら考える国語科学習指導
—説明文・物語文・言語活動 3年間の実践を通して—

大阪市立島屋小学校 研修部

1. 研究主題設定の理由

本校では、めざす子ども像を「自主性と協調性があり、自律できる子」とし、「豊かな心を育み、主体的に活動できる子どもを育てる」ことを学校経営の重点に置いて日々の教育活動を行っている。特に令和3年度からは、「自ら学び、自ら考える国語科学習指導」を研究主題とし研究を進めてきた。主題を設定した理由は以下の通りである。

1つは「文章問題を読む力が弱い」、「自分の表したいことを書く力が弱い」という課題を児童の実態から感じたことである。本校児童は、全国学力・学習状況調査において着実にポイントを上げてきている。また、経年調査においてもほとんどの学年・教科で全市平均を上回っており、学力的には低くないといえる。しかし、普段の授業やテストなどの見取りから、文章を読解する力や意見や考えを言語化する力に課題を感じた。

もう1つは教員全体の授業スキルを向上する必要性が感じられたことである。本校では、40名以上在籍する教員の過半数が20代から30代前半の若手となっている。そこで、学級経営の基礎となる授業、そのスキルの向上が学校経営の安定化に繋がると考えた。

上記の2点をふまえると、研究教科はすべての学習の基礎となる国語科を研究教科とすることが妥当だと考えられた。よって「自ら学び、自ら考える国語科学習指導」を研究主題に設定した。

2. 研究の趣旨

平成29～31年度の指導要領の改訂により、「主体的で対話的な深い学び」が求められるようになった。そこで、本校では特に「主体的」という部分にフォーカスして研究を進めることとした。令和3年度は「説明文を通して主体的に考え、高め合い、理解を深める指導のあり方」、令和4年度は「物語文の学習において、主体的に考え、読み深める指導のあり方」、令和5年度は「児童が主体的に考え、取り組む言語活動への工夫」を副題とし、説明文・物語文・言語活動についてそれぞれ1年間じっくりと研究に取り組むことができた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 指導すべき内容の確認

- 説明文・物語文、それぞれの系統指導表を作成する。
- 全教科の指導計画を併記した単元配列表を作成する。
- 教材文分析に注力し、指導者の教材への理解を深める。

視点② 児童にとって魅力的な言語活動の設定

特に2年間の研究を通して、単元ゴールとなる言語活動設定の重要性を感じたため、3年目には、以下の点に留意して設定することとした。

- どのような意図で設定したのか明らかになるよう、単元ゴールとなる言語活動を指導案に明

記する。

- 過去2年で作成した系統指導表に「教科書に例示された言語活動例」を追記し、言語活動設定の一助とする。
- 言語活動設定に際して、特に「目的意識」と「相手意識」を明確にする。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

視点①にあるように、系統指導表を作成したことで「児童に付けたい力」が明確になった。「児童に付けたい力」に適した言語活動を単元ゴールに設定し、そのゴールに向かう学習展開をデザインする、という授業作りの流れが明確となった。また、単元配列表を作成したことにより、学習展開をデザインする際に、国語科以外の教科、活動も視野に入れて考えられるようになった。以上のように、指導者の授業作りに向かう思考が変容した。

児童の変容に関しては、本研究はもともと「文章問題を読む力が弱い」「自分の表したいことを書く力が弱い」という児童の課題を解決するためにスタートした。3年間の研究を通して、視点②のように、魅力的な言語活動を設定することで、児童には「言語活動をするために、もっと教材文を読まなきゃ」、「言語活動でやったことをもっと他に活かしたい」という主体的に学ぼうとする意欲が芽生えた。その意欲が原動力となり、文章を読み取る活動や自分の考えを表現する活動に進んで取り組む姿が見られるようになった。

(2) 今後の課題

課題① 対話的活動のさらなる充実

本研究において、児童が主体的に学びに向かうための手立ては確立できた。しかし、指導要領にある「主体的で対話的な深い学び」を達成するには「対話的」な活動も必要不可欠である。今後は、対話的な活動を量と質の両面で充実させ、「深い学び」の実現を目指したい。

課題② 教科横断的な実践、他教科への拡張

3年間じっくりと国語科を研究してきた結果、その学びを他教科で活用したり、逆に他教科で学んだ事を国語科で応用したりすることができるようになった。また、魅力的なゴール設定により、児童の主体的に学ぶ意欲が高まるというバックキャスト的な授業デザインの方法論は、他教科でも活用できそうだと考える。

課題③ 地域連携の充実

前述の通り、ゴールとなる言語活動を設定する際には、何をすべきかという「目的意識」と、誰に向けてかという「相手意識」に重点を置いた。今後は地域との連携を充実させることで、より多様な「目的意識」と「相手意識」を想定した言語活動を行えると考える。折しも本校は令和5年12月に100周年記念式典を地域と連携して行ったばかりである。その繋がりを次年度以降にも生かしていければと思う。